

余暇行動に関する分析

—都市と離島の比較—

福満博隆・山本清洋

(1998年10月15日 受理)

An analysis of Leisure and Recreation behavior
—Comparative analysis of the city and the solitary island—

Hiroataka FUKUMITSU, Kiyohiro YAMAMOTO

summary

The purpose of this study was to comparatively analyze Leisure and Recreation behavior of the city and the solitary island.

As the result of this study, the followings were found;

1) The satisfaction of Leisure and Recreation peculiar to the solitary island.

The inhabitant of Yoron-cyo are not so interested in Leisure and Recreation and most of them send no answer about Leisure and Recreation behavior, had Leisure and Recreation behavior of not more kinds than the citizen of Kagoshima-shi. Yoron-cyo's Leisure and Recreation behavior and partners on holidays are the same as they are on consecutive holidays. Quality and quantity of Leisure and Recreation information is limited in Yoron-cyo. Many people in Yoron-cyo are, however, satisfied with Leisure and Recreation behavior and their present information. This can be influenced a social cultural factor peculiar to the solitary island.

2) Rich environment in Leisure and Recreational

Leisure and Recreation behavior in nature by family is more of them enjoyed in Yoron-cyo than in Kagoshima-shi. And the social communication, including eating and drinking, is practiced in Yoron-cyo, not only on holidays but also on weekdays. Namely it follows from these facts mentioned above that mentally

rich Leisure and Recreation life peculiar to the solitary island have been fixed in the limited space.

はじめに

これまでの余暇行動に関する研究では、ある特定のライフステージに注目した横断的な研究研究が多くみられる。寺嶋ら⁶⁾は、高校生の自由時間の過ごし方、遊びの内容、アルバイトの状況、小遣いの使い方を調査し、高校生の余暇活動の支援に対する課題を導き出している。西田⁷⁾は、大学生がレジャースポーツに参加する要因を定期的参加群と不定期参加群の参加動機の比較から導き出している。野村ら⁸⁾および三宅ら¹⁰⁾は、女性特に家庭婦人の余暇活動に影響を及ぼす要因について、夫婦の意識調査と活動状況調査から分析している。佐橋⁵⁾は、高齢者の余暇活動参加における生活満足度を調査し、余暇活動と生活満足度との関連を分析している。これら対して、縦断的な研究として藤本ら⁹⁾は、中高年齢者の余暇活動参加のパターンについて、過去、現在そして将来の余暇活動の実態と意識を調査し、世代や性差における活動参加に影響を及ぼす要因や妨げる要因について分析している。しかし、いずれも都市と地方の文化による違いという視点や自然、高齢期の余暇分析、生き甲斐に欠くことのできない宗教と文化という視点が欠如している。換言すれば、現代文明への批判がなされ、有限の自然との共生、コミュニティの崩壊、都市文明の限界が指摘される状況を考えるときに、人間の存在という視点から余暇行動を分析する哲学が欠如している。

一番ヶ瀬らは、特に高齢化社会を迎える21世紀では生活基盤に視点を置く生活余暇論を提起している²⁾。しかし、依然として現代先進国、都市文化中心の発想から抜け出していない。人間の生存が現代文明において限界があるとすれば、現代文明の浸透度の弱い地方に根ざした文化相対主義の立場からの余暇論が必要となる。

鹿児島の離島は社会文化的に都市文化と異なる自然や宗教を基盤とした社会文化構造を反映しており、当然そこでの余暇現象は現代で支配的な余暇論と異なる原理に基礎づけられていることが予測される。本研究ではこのような前提から、現代文明下にある都市と離島の余暇行動の比較分析を行い、その原理を導く基礎資料を得ることを目的とする。

研究方法

- 1) 研究対象は、中核指定都市鹿児島市（人口54万人）³⁾と鹿児島県の最南端に位置する与論町（県本土より592km離れた、周囲23.7km、面積20.5km²の小さな島である。人口6,400人で、内65歳以上が約16%を占めており、第1、第2次産業就業者が約65%弱を占めている。）である³⁾。
- 2) 対象は鹿児島市、与論町共に選挙人名簿を基にした2段階無作為抽出を行い、前者が372名

(41.3%)、後者が172名(43.0%)であった。(回収率)

3) 調査表は基礎項目5, 健康項目4, 余暇行動項目25から構成した。

4) 調査時期：調査票の配布回収 1997年7月～10月

5) 分析方法：基礎項目の1つを除いた33項目において単純集計の比較分析(カイ自乗検定)を実施した。

結果と考察

1) 対象者の属性

対象者の男女比(表1)は、両地域に有意差はなく、女性の割合がやや上回っていた。これは両地域とも女性の人口比がやや上回っているという平成7年度国勢調査結果と同じであった。

年齢構成比(表2)は、50代以上の年代層が、鹿児島市では、50%に満たなかったのに対して、与論町では、50%を越えていた。また、職業(表3)は、鹿児島市では、販売・サービス業の第3次産業就業者が最も多く、与論町では、農林漁業の第1次産業就業者が最も多かった。これらの結果は、鹿児島市が人口54万人の中核指定都市であり、産業別就業者構成比が第1次産業1.4%、第2次産業18.1%、第3次産業80%である(平成7年度国勢調査結果)³⁾のに対して、離島である与論町では、産業が少ないために、若者が島を離れていく過疎化が起きていることによるものと考えられる。

スポーツクラブあるいは趣味のクラブ等への所属(表4)では、両地域の間有意差(1%水準)がみられた。「以前所属していたが現在無所属」の者が、与論町よりも鹿児島市は多く、「以前も現在も無所属」の者が、鹿児島市よりも与論町が多かった。これは、鹿児島市では、与論町よりも多くの者がクラブに所属する環境は整っているが、クラブに継続して所属することを妨げる要因があると推察される。

表1 性別

	(%)	
	鹿児島市	与論町
男性	37.5	48.4
女性	62.5	51.6
合計	100	100
	N=368	N=161

有意差なし

表2 年齢構成

	(%)	
	鹿児島市	与論町
20代	13.0	8.2
30代	15.1	13.5
40代	24.6	20.5
50代	15.7	22.2
60代	16.2	14.0
70代	14.9	18.7
80代以上	0.5	2.9
合計	100	100
	N=370	N=171

P<0.05

表3 職業

	(%)	
	鹿児島市	与論町
農林漁業	0.5	25.6
労務・現業	1.6	3.7
販売・サービス	21.3	11.0
事務・保安	10.9	4.3
専門職・管理職	14.4	10.4
主婦業	21.0	16.6
学生	1.4	0.0
自由業	3.8	4.9
無職	13.1	13.5
その他	12.0	10.4
合計	100	100
	N=367	N=163

P<0.01

表4 クラブ所属状況

	(%)	
	鹿児島市	与論町
所属している	27.8	25.6
以前は所属現在は無所属	28.4	15.9
以前も現在も無所属	43.8	58.5
合計	100	100
	N=363	N=164

P<0.01

表5 身体の調子

	(%)	
	鹿児島市	与論町
非常に調子よい	7.6	12
まあ調子よい	66.5	49.1
どちらとも	14.4	22.2
調子よくない	10.1	15
非常に具合が悪い	1.4	1.8
合計	100	100
	N=367	N=167

P<0.01

表6 生活の張り

	(%)	
	鹿児島市	与論町
たいへんある	15.4	20.1
まあある	62.8	47.0
どちらとも	13.5	20.1
あまりない	6.9	11.6
ほとんどない	1.4	1.2
合計	100	100
	N=363	N=164

P<0.01

2) 対象者の健康状態

身体の調子(表5)と生活の張り合い(表6)について、両地域の間有意差(1%水準と5%水準)がみられた。「身体の調子がよい」および「生活に張り合いがある」と答えた者が、与論町よりも鹿児島市は多く、身体の調子と生活の張り合いについて「どちらとも言えない」と答えた者が、鹿児島市よりも与論町が多かった。これは、与論町よりも鹿児島市の方が、健康状態が良好であることや生活の張り合いがあることを意識している者が多いことを示していると考えられる。

気分のむら(表7)と人間関係(表8)については、両地域の間有意差がみられなかった。

表7 気分のむら

	(%)	
	鹿児島市	与論町
ほとんどない	16.5	20.4
ないほう	35.0	31.5
どちらとも	22.9	29.6
あるほう	20.7	14.8
いつもある	5.0	3.7
合計	100	100
	N=367	N=167

有意差なし

表8 人間関係

	(%)	
	鹿児島市	与論町
非常によい	17.1	19.5
よいほう	58.4	59.8
どちらとも	18.7	18.3
あまりよくない	4.7	2.4
悪い	0.6	0.0
合計	100	100
	N=361	N=164

有意差なし

両地域とも体の調子がよい、生活に張り合いがある、気分のむらがない、人間関係もよい状態であると答えた者が多く、対象者は身体的および精神的、社会的に健康な状態であると推察される。

3) 対象者の余暇行動

- (1) 余暇と仕事の考え方 (表9)：両地域間に有意差 (1%水準) がみられた。

両地域とも、「これからの時代は、仕事と余暇を両立させる生活が大切」と答えた者が多かったが、「余暇を中心とした生活が大切」および「出来るならば余暇を中心とした生活が大切」と答えた者は、与論町よりも鹿児島市に多く、「どちらかといえば仕事を中心とした生活が大切」および「仕事を中心とした生活が大切」と答えた者は、鹿児島市よりも与論町に多かった。これは、鹿児島市の方が余暇生活を肯定的に捉えている者が多いことを示していると思われる。

- (2) 余暇活動への関心 (表10)：両地域間に有意差 (1%水準) がみられた。

関心があると答えた者が、与論町よりも鹿児島市は多く、余暇に対する関心の高さを示していると思われる。

これら(1)(2)の要因として、年齢構成比の違いと余暇に対する認識の違いが推測される。

- (3) 余暇活動の満足感 (表11)：両地域間に有意差がみられなかった。

両地域とも現在の余暇活動に満足している者が不満の者よりも多く、両地域とも現在の余暇活動に満足していることを示していると思われる。

- (4) 余暇活動の阻害要因 (表12)：与論町では、「仕事が忙しい」を選んだ者が最も多かった (有意差0.1%水準)。これは、与論町に第1次産業就業者が多いことと余暇よりも仕事を大切に考える者が多いことによると推測される。

鹿児島市では、「お金が掛かる」を選んだ者が多かった (有意差0.1%水準)。これは、与論町に比較して鹿児島市では、お金の掛かる余暇活動の種目が多く、活動範囲も広範囲に渡り移動等に経費が掛かることによると推測される。また「長期休暇が取れない」を選んだ者も多かった

表9 仕事と余暇の考え方

	(%)	
	鹿児島市	与論町
余暇志向	10.4	4.9
できるなら余暇志向	13.7	11.0
両立	72.8	74.4
まあ仕事志向	2.5	7.3
仕事志向	0.5	2.4
合計	100	100
	N=364	N=164

P<0.01

表10 余暇への関心

	(%)	
	鹿児島市	与論町
大いに関心ある	33.0	20.1
まあ関心ある	50.7	43.3
どちらとも	8.2	13.4
あまり関心ない	6.5	15.2
ほとんど関心ない	1.6	7.9
合計	100	100
	N=367	N=164

P<0.001

表11 余暇活動の満足感

	(%)	
	鹿児島市	与論町
大満足	5.0	7.3
だいたい満足	38.1	39.4
どちらとも	24.0	27.3
少し不満	25.4	21.8
大変不満	7.5	4.2
合計	100	100
	N=362	N=165

有意差なし

表12 余暇活動の阻害要因

	複数回答 (%)		
	鹿児島市	与論町	
仕事で忙しい	35.5	50.6	※※※
仲間がいない	18.3	9.9	※
家族の面倒で忙しい	14.0	12.8	n.s.
クラブが不足	9.1	6.4	n.s.
施設が少ない	21.8	17.4	n.s.
お金が掛かり過ぎる	23.4	9.9	※※※
情報が分からない	14.5	8.1	※
講習会が少ない	9.7	2.9	※※
指導者がいない	1.3	5.2	※
長期休暇がとれない	27.2	16.3	※※
やる気がない	6.2	13.4	※※
活動場所が遠い	4.0	1.7	n.s.
近所に公園がない	3.2	9.9	※※
その他	9.1	6.4	n.s.
	N=372	N=172	

注) ※※※ P<0.001 ※※ P<0.01 ※ P<0.05 n.s. 有意差なし

注) 回答は2回まで選択可

(有意差1%水準)。これは、鹿児島市に第3次産業就業者が多いことと仕事よりも余暇を大切に考える方が多いことによると推測される。

- (5) 平日および休日、連休の余暇活動(表13): 与論町の休日と連休との間を除くすべての比較において、1%水準で有意差が認められた。

平日の鹿児島市ではメディア活動が最も多く、次に社交飲食および文芸活動が多かった。与論町ではメディア活動が最も多く、次に社交飲食、自然研究、アウトドアスポーツが鹿児島市より

も多かった。

休日の鹿児島市では、平日と比較してメディア活動が減り、社交飲食、行楽・旅行、ゲーム・ギャンブル、運動・スポーツが多くなった。与論町でもメディア活動が減り、社交飲食、行楽・旅行が多くなったが、加えて自然研究とアウトドアスポーツが鹿児島市よりも多くなった。

連休の鹿児島市では、休日と比較してさらにメディア活動が減り、社交飲食および行楽・旅行が多くなった。

以上のことから、鹿児島市の余暇活動の特徴は、平日には主にメディア活動が行われ、休日や連休になると社交飲食および行楽・旅行が多くなると考えられる。また与論町の余暇活動の特徴は、平日には主にメディア活動が行われているが、自然研究、アウトドアスポーツは、平日および休日や連休において鹿児島市よりも多く行われ、社交飲食は平日や休みに関係なく行われていると考えられる。与論町において休日と連休の余暇活動に違いがみられない要因として、離島であるために行楽や旅行を行う場所や機会が限られることが推測される。また日常的に自然研究、アウトドアスポーツが行なわれている要因として、島が豊かな自然に囲まれていることが推測される。さらに与論町の生活文化として、日常的な社交飲食が行われていると推測される。

表13 平日および休日、連休の余暇活動

	複数回答 (%)					
	平日		休日		連休	
	鹿児島市	与論町	鹿児島市	与論町	鹿児島市	与論町
美術工芸	2.8	0.9	1.6	1.9	0.9	1.8
文芸活動	10.0	6.0	6.0	6.2	3.6	4.5
音楽	3.5	2.8	2.1	2.3	0.7	0.9
自然研究	2.0	5.6	2.7	8.5	1.7	8.6
アウトドアスポーツ	0.2	4.1	1.4	8.8	1.7	10.4
運動・スポーツ	3.0	4.1	5.7	3.8	3.0	4.5
行楽・旅行	2.9	1.9	18.6	8.1	35.2	15.8
社交飲食	14.3	17.9	29.5	19.6	32.4	19.9
メディア	51.5	47.0	18.1	24.6	11.2	22.6
ゲーム・ギャンブル	2.9	1.6	5.8	3.8	2.2	2.7
奉仕的活動	0.4	0.6	0.3	0.4	0.3	0.5
ごろ寝	1.3	2.2	1.9	3.5	1.2	1.8
その他の活動	5.2	5.3	6.2	8.5	5.9	5.9
合計	100	100	100	100	100	100
回答数	N=903	N=319	N=860	N=260	N=755	N=221

注) 平日、休日、連休のそれぞれに3つまで自由記入させ、その回答を13のカテゴリーに分類した。

注) 与論町の休日と連休との間を除く全ての比較において、1%水準で有意差が認められた。

表14 平日および休日、連休の余暇の相手

(%)

	平日		休日		連休	
	鹿児島市	与論町	鹿児島市	与論町	鹿児島市	与論町
一人	50.4	37.4	15.5	16.8	8.2	9.8
兄弟・姉妹	2.3	1.5	3.9	0.9	5.4	5.9
夫婦	14.2	8.4	20.2	9.7	18.4	7.8
自分の家族	10.1	24.4	25.3	33.6	38.0	40.2
いろいろな家族同士	0.9	1.5	2.4	1.8	3.5	4.9
クラブの仲間	4.3	7.6	4.8	6.2	2.2	5.9
職場・学校の友達	5.2	2.3	6.3	5.3	2.2	2.9
近所の友人	5.2	13.0	3.9	15.0	3.5	6.9
昔からの友人	4.3	1.5	11.0	8.8	10.8	7.8
その他の友人	2.9	2.3	6.8	1.8	7.9	7.8
合計	100	100	100	100	100	100
	N=345	N=131	N=336	N=113	N=316	N=102

注) 連休の鹿児島市と与論町との間および与論町の休日と連休との間を除く全ての比較において、

1%および5%水準で有意差が認められた。

表15 希望する平日および休日、連休の余暇活動

複数回答 (%)

	平日		休日		連休	
	鹿児島市	与論町	鹿児島市	与論町	鹿児島市	与論町
美術工芸	10.8	10.3	7.4	5.4	2.5	8.6
文芸活動	15.8	6.9	5.7	10.8	4.3	5.7
音楽	1.9	3.4	1.1	0.0	0.6	0.0
自然研究	5.1	0.0	5.1	5.4	3.1	2.9
アウトドアスポーツ	0.6	13.8	9.1	18.9	12.3	14.3
運動・スポーツ	31.6	13.8	37.5	5.4	10.5	11.4
行楽・旅行	8.2	0.0	15.9	43.2	56.2	45.7
社交飲食	5.1	6.9	5.1	2.7	3.7	2.9
メディア	6.3	27.6	5.1	5.4	0.0	2.9
ゲーム・ギャンブル	2.5	3.4	0.6	2.7	1.2	2.9
奉仕的活動	0.0	3.4	2.3	0.0	1.9	0.0
ごろ寝	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
その他の活動	12.0	10.3	5.1	0.0	3.7	2.9
合計	100	100	100	100	100	100
回答数	N=158	N=29	N=176	N=37	N=162	N=35

注) 平日、休日、連休のそれぞれに2つまで自由記入させ、その回答を13のカテゴリーに分類した。

- (6) 余暇の相手（表14）：連休の鹿児島市と与論町との間および与論町の休日と連休との間を除くすべての比較において、1%および5%水準で有意差が認められた。

平日の鹿児島市では、「一人」と答えた者が最も多かった。与論町では、「一人」と答えた者が最も多かったが、鹿児島市と比較するとやや少なかった。次に「自分の家族」と答えた者が多かった。

休日の鹿児島市では、「自分の家族」、「夫婦」と答えた者が多かった。休日の与論町では、「自分の家族」と答えた者が最も多く、これは連休の鹿児島市および与論町の傾向と同じであった。「自分の家族」と答えた者は、平日および休日、連休とも鹿児島市よりも与論町が多かった。これは、鹿児島市よりも与論町では、家族行動型の余暇活動が多いこと示しており、家族行動をあまりしない20代が少ないことと平日においても家族行動できる家族の関わり方が存在することが推測される。

- (7) 希望する余暇活動（表15）：希望する余暇活動に対する回答数がとても少なかった。これは、余暇活動の満足感（表11）で示したように、現在の余暇活動に満足している者が多いためであると推察される。

回答数は少なかったが、鹿児島市では、平日と休日に運動・スポーツを希望する者が多く、与論町では、休日と連休に行楽・旅行を希望する者が多かった。これらの項目は、現在の余暇活動（表13）において活動実施率が低かったものであり、鹿児島市では、余暇に健康志向を求め、与論町では、非日常志向を求めていると推察される。

- (8) 自由時間（表16、表17、表18）：自由時間の満足感では、両地域の間には有意差がみられず、「十分ある」と答えた者が「不足している」と答えた者よりやや多かった。

自由時間量では、両地域の間には有意差がみられず、「2時間以上」と答えた者が最も多く、次に「1時間以上」と答えた者が多かった。

表16 自由時間の満足感

	(%)	
	鹿児島市	与論町
十分ある	16.8	13.3
まあ十分ある	33.8	28.3
どちらとも	15.1	18.7
少し不足	22.8	25.3
足りない	11.5	14.5
合計	100	100
	N=364	N=166

有意差なし

表17 自由時間量

	(%)	
	鹿児島市	与論町
1時間未満	15.4	20.4
1時間以上	19.7	23.2
2時間以上	31.6	30.3
3時間以上	15.7	12.7
4時間以上	7.5	3.5
半日以上	10.1	9.9
合計	100	100
	N=345	N=142

有意差なし

自由時間帯では、鹿児島市が「午後」から「PM10～AM1」の時間帯に多く、与論町が「昼休み」から「PM7～PM10」の時間帯に多かった。鹿児島市の自由時間帯の方が夜遅い要因として、遊興関連施設の違いと年齢構成比の違いが推測される。

(9) 一月平均の余暇費用 (表19)：両地域の間には有意差 (1%水準) がみられた。

鹿児島市では、「1～2万円代」が最も多く次に「3～4万円代」が多かった。与論町では、「1万円未満」が最も多く、次に「1～2万円代」が多かった。これは、与論町の余暇活動では、鹿児島市に比較して経費が掛かっていないことを示しており、余暇活動の阻害要因 (表12) にお

表18 自由時間帯

	複数回答 (%)		
	鹿児島市	与論町	
朝食前	6.8	6.7	n.s.
午前中	15.1	8.4	※※
昼休み	6.1	18.5	※※※
午後	24.7	18.1	※※
PM7～PM10	23.2	30.3	n.s.
PM10～AM1	19.1	13.0	※※
AM1～AM4	4.9	5.0	n.s.
	N=372	N=172	

注) ※※※ P<0.001 ※※ P<0.01 n.s. 有意差なし

注) 回答は2回まで選択可

表19 余暇費用 (一月平均)

	複数回答 (%)	
	鹿児島市	与論町
1万円未満	22.6	40.9
1～2万円代	30.0	27.0
3～4万円代	26.9	18.2
5～10万円代	10.3	7.3
10万円代	5.7	2.2
20万円代以上	4.6	4.4
合計	100	100
	N=350	N=137

P<0.01

表20 余暇情報の入手先

	複数回答 (%)		
	鹿児島市	与論町	
新聞記事	40.6	9.9	※※※
ラジオ・テレビ	36.6	32.0	n.s.
子ども	8.3	6.4	n.s.
雑誌・本	28.0	8.7	※※※
旅行会社の広告	8.9	4.7	n.s.
職場内のお知らせ	0.8	4.7	※※
口込み	33.9	30.2	n.s.
その他	4.3	22.7	※※※
	N=372	N=172	

注) ※※※ P<0.001 ※※ P<0.01 n.s. 有意差なし

注) 回答は2回まで選択可

表21 余暇情報の満足感

	複数回答 (%)	
	鹿児島市	与論町
十分に入っている	4.4	4.1
必要な分は入っている	39.0	35.1
どちらとも	32.8	32.4
不足している	20.6	19.6
ほとんど不足	3.2	8.8
合計	100	100
	N=367	N=167

有意差なし

- いて、鹿児島市では、「お金が掛かる」を選んだ者が多かったことを裏付けていると思われる。
- (10) 余暇情報の入手先 (表20)：両地域とも「ラジオ・テレビ」、「口込み」と答えた者が多かった。「新聞記事」、「雑誌・本」と答えた者は、与論町よりも鹿児島市が多かった (有意差0.1%水準)。離島である与論町では、新聞や雑誌、本等に地元の余暇活動に関する情報はほとんど記載されていないと思われる。また「その他」と答えた者が与論町では多かった。これは、役場などの地元行政による公報が利用されていると考えられる。
- (11) 余暇情報の満足感 (表21)：両地域の間有意差がみられなかった。
- 両地域とも現在の余暇に関する情報に対して「必要な分は入っている」、「どちらとも言えない」と答えた者が多かった。鹿児島市における情報の方が多様であり、量的にも多いと予想される。しかし、与論町では現在の情報に対して多くの者が満足していると思われる。したがって、与論町では、余暇に求められている情報が鹿児島市とは異なることが予測できる。
- (12) 余暇教育の必要性 (表22)：両地域の間有意差がみられなかった。
- 両地域とも現在の余暇に関する情報に対して「どちらかと言えば必要」と答えた者が多く、余暇教育の必要性を感じている者は、両地域とも60%に達していた。
- (13) 教育の場所 (表23)：余暇教育の必要性 (表22) において「絶対必要」、「どちらかと言えば必要」と答えた者に回答してもらった。
- 両地域とも「市町村の公開講座等で」、「自由に集まった仲間」と答えた者が多かった。「学校教育で」と答えた者は、与論町よりも鹿児島市が多かった (有意差0.1%水準)。
- これら(12)(13)より、両地域とも多くの者が余暇教育の必要性を感じており、自由意志で集まった環境において余暇教育が行われることを望んでいると考えられる。また、与論町では、主に大人たちに対する余暇教育の機会について考えているのに対して、鹿児島市では、学校教育における子どもたちへの余暇教育も望んでいると推測される。

表22 余暇教育

	(%)	
	鹿児島市	与論町
絶対必要	18.6	14.3
必要	47.8	45.5
どちらとも	17.7	16.9
必要と思わない	13.6	18.2
全く必要ない	2.3	5.2
合計	100	100
	N=345	N=154

有意差なし

表23 余暇教育場所

	複数回答 (%)		
	鹿児島市	与論町	
学校教育で	35.8	18.5	※※
市町村の公開講座で	41.9	44.6	n.s.
職場で	15.3	6.5	※
自由に集まった仲間	31.4	34.8	n.s.
インターネットで	12.7	9.8	n.s.
旅行会社で	6.1	4.3	n.s.
	N=229	N=92	

注) ※※ P<0.01 ※ P<0.05 n.s. 有意差なし

注) 回答は2回まで選択可

まとめ

都市と離島の余暇行動の比較分析を行った結果、以下のような結論を導き出すことができた。

1) 離島特有の余暇満足

与論町では、鹿児島市よりも余暇への関心がやや低く、余暇行動も無回答が多く、多種多様な余暇行動がみられず、休日と連休の余暇行動や余暇の相手にも変化がみられない。また余暇情報の内容や入手量も限られている。しかしながら、現在の余暇行動や余暇情報に多くの人が満足しており、これは、離島固有の社会文化的要因が働いていることが推察される。

2) 豊かな余暇環境と余暇生活

与論町では、鹿児島市よりもやや安い費用で、自然環境を利用した余暇行動や家族単位での余暇行動が多く行われている。また、平日も休みの日も関係なく、日常的に社交飲食が行われている。すなわち、限られた空間のなかで、精神的に豊かな離島固有の余暇生活が定着していると考えられる。

参考文献

- 1) 青柳まちこ：「遊び」の文化人類学，講談社，1977.
- 2) 一番ヶ瀬康子，藪田碩哉，牧野暢男：余暇生活論，有斐閣，1994.
- 3) 鹿児島県市町村自治研究会：鹿児島県市町村要覧，平成7年度，1-2，105-106，1995.
- 4) 鹿児島大学教育学部地域社会教育学科社会教育学研究室：「誠の島」に生きる人々のとりくみと学び-与論町地域生涯教育調査報告-，95-102，1998.
- 5) 佐橋由美：高齢者の生活充足と余暇活動参加に関する研究-愛好スポーツの性格と関連して-，レクリエーション研究．第28号 60-63，1993.
- 6) 寺嶋文代，松浦三代子：高校生の余暇活動に関する実態調査，レクリエーション研究．第34号 44-47，1996.
- 7) 西田俊夫：男子学生のレジャースポーツ行動の参加動機に関する研究-定期的参加者と不定期的参加者との比較-，レクリエーション研究．第30号 74-77，1994.
- 8) 野村一路，藤本祐次郎，藪田碩哉，三宅基子：女性の余暇活動に影響を及ぼす要因に関する研究(1)-妻の余暇活動に対する夫婦の意識調査から-，レクリエーション研究．第25号 18-19，1991.
- 9) 藤本淳也，原田宗彦：中高年齢者の余暇活動参加パターンに関する研究-特に定年退職予定者の余暇活動について-，レクリエーション研究．第24号 1-8，1993.
- 10) 三宅基子，藪田碩哉，野村一路：女性の余暇活動に影響を及ぼす要因に関する研究(2)-妻の余暇活動参加パターンの分析から-：レクリエーション研究．第25号 20-21，1991.